

第6章 考察

第1節 四隅突出型墳丘墓の付隨施設について —「円形状石組」の認識に関して—

はじめに

中国地方の山間部や日本海沿岸部を中心に営まれる四隅突出型墳丘墓は、地域史的研究はもとより列島規模の弥生後期社会像を描く上でも重要な位置にある考古資料として、広く研究の俎上に上っている。この四隅突出型墳丘墓を考古資料として分析する際に、最も注目されてきたのが「突出部」である。型式学的研究を始め^{註1)}、突出部を構成する諸要素を分類し、その組み合わせ関係を様式的に捉える新しい検討も行われている^{註2)}。一方で、貼石や列石などの「配石構造」の分類検討も試みられ、型式的な変遷過程、系譜差、地域性、墳丘規模に見る階層性等が検討されている^{註3)}。

小稿では四隅突出型墳丘墓の「突出部」の形態、貼石の形態とは別に、これまであまり注目されていなかった列石と貼石に付随、あるいはを利用して造られている円形状の石組（以下、「円形状石組」とする）について検討を行う。

「円形状石組」の初例と考えられるものが、これと同義のものか否かという検討も必要であるが、「ストーンサークル」という名称で島根県邑智郡瑞穂町所在の順庵原1号墓で報告されている^{註4)}。非常に特殊な遺構であったため、四隅突出型墳丘墓関連の研究では川原和人氏や吉川正氏の見解を除き^{註5)}、その後は議論の対象とはならなかった^{註6)}。

今回この「円形状石組」を取り上げたのは、中野美保1号墓の調査の中で、使用石材の形状から順庵原1号墓の「ストーンサークル」とは規模において異なるが、円形状に組まれた石組みが検出されたことに端を発する。主に「円形状石組」の評価とその位置づけに対して見通しを述べることを目的とする。同時に「そもそも、石が円形に組まれているという状態が、客観的な観察の結果見出されたものなのか、主観的な認識によるものなのか。」という意見が十分に予想されるので、これに対する当報告書の説明責任の1つとして小稿をなすこととした。

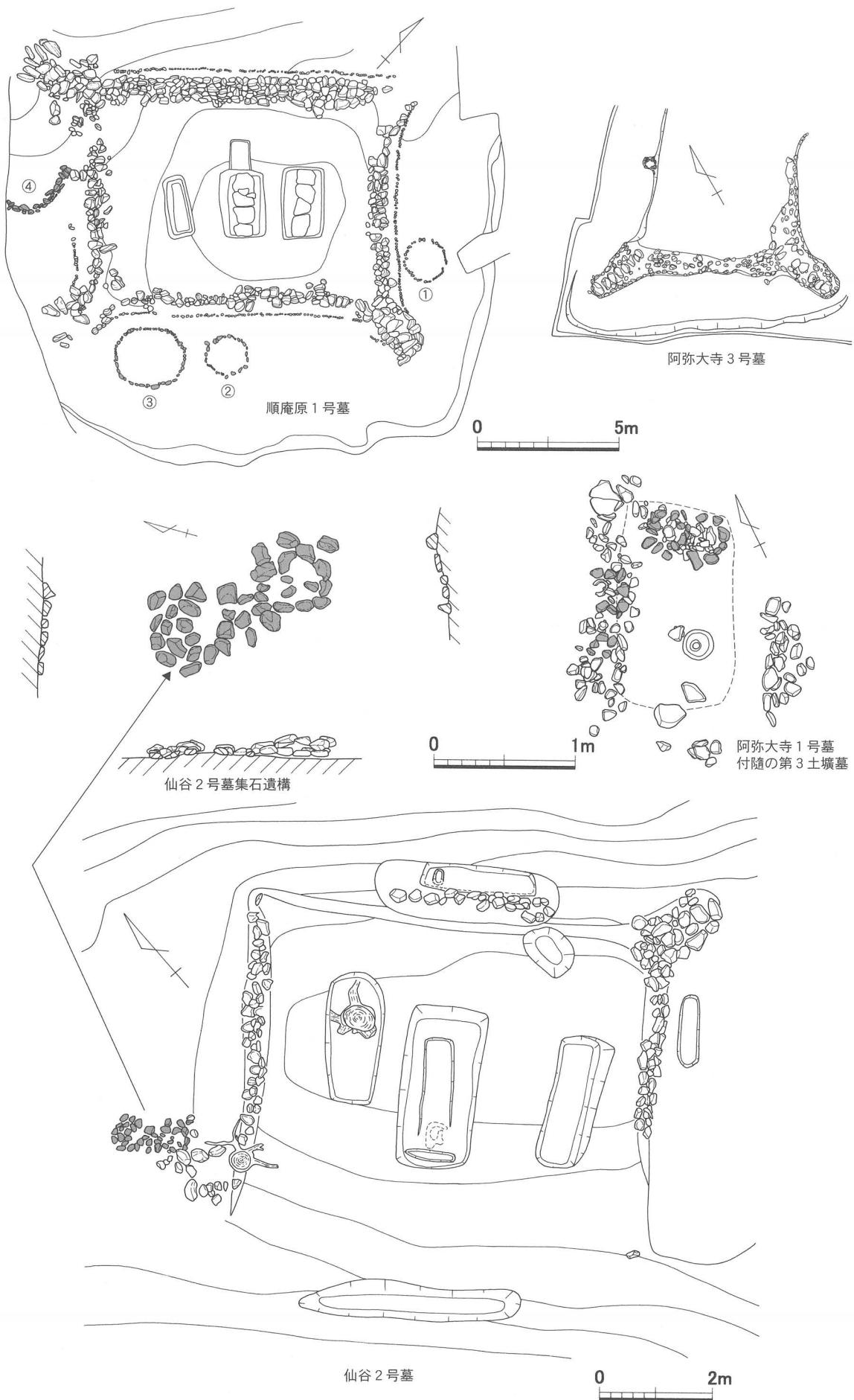
ところで「円形状石組」とは別に、四隅突出型墳丘墓の墳丘周辺には配石墓や石囲土壙墓などの埋葬施設、性格不明の集石遺構等が営まれている場合が多い。それぞれの遺構はもちろん、「円形状石組」と区別するのが困難なものが含まれている^{註7)}。このため、本来的には系統的に遺構の分類を進めた上で「円形状石組」を論じなければならないが、紙幅の都合もあるので、「円形状石組」の「形態」や「規模」、「検出地点」の共通要素に着目して、類例資料の抽出を行うこととする。

そこで、小稿では先ず第一に過去に報告された四隅突出型墳丘墓の関連文献に掲載された報告文や遺構図面、写真図版から、円形状石組の可能性のあるものを抽出する。次に、遺構の出現時期や地域性、規模、形態等について検討を加え、円形状石組の評価と位置付けを提示することに努めた。なお、中野美保1号墓の円形状石組についての詳細は前章で報告してあるので、可能な限り繰り返さないこととする。

1. 四隅突出型墳丘墓に見られる円形状石組の類例（第127～128図）

（1）順庵原1号墓（島根県邑智郡瑞穂町：弥生時代後期中葉）

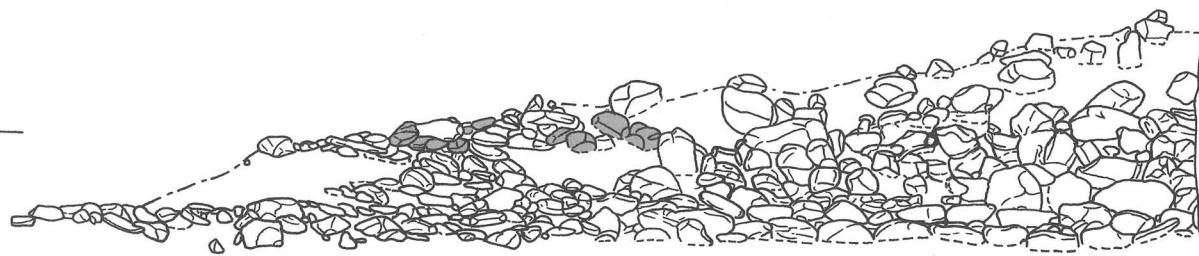
「ストーンサークル」として報告されている。墳丘に沿って施された「立石（縁石）」（棒状石列



第127図 円形状石組の諸例 (1)



西谷 3号墓 南西突出部



0 2m

第128図 円形状石組の諸例 (2) (S = 1 / 50)

と報告される）に使用された同様の石材で、「円形状石組」が墳丘の周溝内で3箇所確認されている。同じく、墳丘の北東辺に弧状に石が並べられた箇所がある。調査区外に延びるため、その全貌は不明である。「円形状石組」の可能性もあるが、その判断は保留される。墳丘東辺の「円形状石組」は直径約1.5mの規模で、墳丘南側には 2.0×2.5 mの橢円状の「円形状石組」と、直径1.45mの「円形状石組」がある。なお、順庵原1号墓の「円形状石組」は、墳丘に伴う「立石（縁石）」と同等規模、あるいは小振りの石が用いられており、他の四隅突出型墳丘墓では見られない遺例である。ただし、他の四隅突出型墳丘墓の「円形状石組」が墳丘に使用される貼石や立石（縁石）とほぼ同じ規模の石を使用していることからすれば、後述する土器の出土状況と併せて、順庵原1号墓のストーンサークルも同じ遺構として認識しても問題はないものと考えられる。また、順庵原1号墓からは3つの主体部が検出されており、3つの「円形状石組」はこれに対応して造られた可能性が報告されている。

（2）仙谷2号墓（鳥取県西伯郡淀江町：弥生時代後期中葉）

墳丘北西側の加工段の底面南側（周溝内か）で10~20cm大の角礫を使用した長さ1.55m、幅0.65mの範囲で径60~65cmの同心円状に凝集した2つの「円形状石組」が眼鏡状に並列している。隣接する墳丘北西隅にも石組が確認されているが、これは突出部状にも見える。周辺からは器台が2個体、甕片が5個体分検出されている。

（3）阿弥大寺3号墓（鳥取県倉吉市：弥生時代後期中葉）

報告書の記載はないが、平面図・写真図版では確認できる。墳丘西側のほぼ中央部に直径50cmの「円形状石組」が1つ見られる。ただし、3号墓の墳丘は北半分が削平を受けており、墳丘西側の貼石の一部が偶然「円形状石組」に見える可能性は否定できない。

（4）阿弥大寺1号墓付随の第3土壙墓周辺の集石遺構（鳥取県倉吉市：弥生時代後期中葉）

土壙墓周辺（一部は墓壙上）に施された集石遺構。そのうち、墓壙北側の集石遺構は70cm×40cmの範囲に2つの同心円状に石が凝集する「円形状石組」が眼鏡状に施されているように観察される。その形態は、中野美保1号集石遺構や仙谷2号墓のそれに類似する。さらに、後述する土器の出土状況は中野美保1号墓周辺のあり方と類似している。

（5）中野美保1号墓（島根県出雲市：弥生時代後期後葉）

墳丘周辺部と立石の一部を利用して、あるいは隣接して直径50cm程度の円形状石組が10前後造られている。墳丘東辺中央部の「円形状石組」は貼石や立石を改変して、2~3つの「円形状石組」が隣接し合って造られているよう見える。このうち、東辺中央部の「円形状石組」の一つからは注口土器の口縁部（全周する）と注口部（全部）、頸部（一部）が検出された。また、北西裾の「円形状石組」の一部と思われる弧状に並べられた石の内側より甕1点が口縁部を下に向けた状態で出土している。

（6）西谷3号墓（島根県出雲市：弥生時代後期後葉）

南西突出部の調査では、配石構造が詳細に調査され「墳端装飾」の構造が明らかにされている。墳丘規模も当該時期において最大級になり、「墳端装飾」も荘厳化する段階の所産である。

西谷3号墓の南西突出部（調査部分）では、他の類例と異なり「円形状石組」は墳端外からは確認されていない。図面及び写真図版からは「墳端装飾」部の「立石」と「敷石」、墳丘斜面の貼石に「円形状石組」が確認できる。第128図のスクリーントーンがそれに相当する。もちろん、この

見解を主観的なものとする批判は免れ得ない。これは、「貼石」や「立石」、「敷石」が脱落した結果、偶然にして円形状に見えるという指摘につながる。しかし、図面と写真図版上の観察において、第128図に記した「円形状石組①」に注目してもらうと、「立石」列の3つの石だけが外側に向けて弧状に飛び出しているのが見られる。そして、敷石と貼石が円形状に脱落し、空白部分を形成している。また、その中心部には石が2つ存在する。「円形状石組②」にも中心部に1つの石が存在している。このように見ると、「立石」列を曲げてまで「円形状石組」を形成する意図が観察できるのである。ただし、「円形状石組①・②」を除く「円形状石組③～⑧」は、「主観的に円形状に見える」、あるいは「偶然の所産」とする指摘に対しては否定しきれない。ただし、いずれの平面規模も⑧の直径60～70cmを最小に、概ね直径80～100cm程度になる。

他にも、後期後葉の資料を中心として、「円形状石組」の可能性が考えられるものが幾つか見られるが、客観的根拠を提示することが難しいものが多く、既刊の報告書にも記載事項がないため今回は類例資料としては取り上げなかった。

2. 円形状石組の用途

以上、配石構造を有する四隅突出型墳丘墓が約70数基ある中で、円形状石組の可能性が考えられるものは中野美保1号墓例を含めて5例しか提示できなかった。しかし、これを検討する上で非常に興味深い現象が見られる。それは「円形状石組」の内部、あるいはその周辺から、その原位置を保ったものも含めて土器が出土している点である。ここで、四隅突出型墳丘墓の周辺で原位置を保ったと考えられる土器の出土状況に対してもその類例を挙げ、両者の出土状況を比較し、「円形状石組」の用途に対する評価とも絡めて考えたい。なお、大半の四隅突出型墳丘から検出される土器の出土位置は、周溝内を含む墳丘裾と、主体部直上・周辺の二者に大別できる。後者の出土状況は今回検討の対象外とする。

(1) 陣山墳墓群（広島県三次市：弥生時代中期後葉）

この墳墓群は中国地方山間部にあって、最古に属する四隅突出型墳丘墓5基で構成されている。原位置に近い状況を保っていると考えられる土器は、周溝底部や貼石と縁石の間の犬走り状平坦面で確認されている。大半の土器は倒れた状態で出土しているが、3号墓では周溝床面を掘り窪めた中に甕が立てられる。また、4号墓の張出状施設の貼石外側でも壺が立てられた状態で出土している。いずれの土器も中野美保1号墓のように倒立はしていない。

(2) 阿弥大寺1号墓（鳥取県倉吉市：弥生時代後期中葉）

西側突出部の基部近くで、貼石に密着した状態で甕が検出されている。写真図版を見る限りでは口縁部を下に向けた状態で出土している。

同じく、阿弥大寺1号墓に付随する第3土壤墓の周辺からは、器台・壺・甕が中野美保1号墓周辺出土の土器と同様に、それぞれ口縁部を下にした状態で検出されている。このうち、壺と甕は「円形状石組」の可能性のある集石群に隣接して出土している。集石や土器は1号墓というより、土壤墓を使用対象にしたものと考えられる。

(3) 間内越1号墓（島根県松江市：弥生時代後期後葉）

南西突出部裾東側の周溝で、大型の壺が1つ据え置かれた状況で出土している。同じく、南東突出部裾北側の周溝でも壺の破片が集中して見つかっている。

(4) 来美1号墓（島根県松江市：弥生時代後期後葉）

墳丘南裾部の周溝内で、壺が1点据え置かれていた状態で出土している。「底部は地面にきちんと据え置かれた状態を保ち、本来の供献位置のままと考えられた。」と報告されている。

以上のように、周溝内や墳丘裾から土器片が出土する場合が大半を占める中で、当時のままの状態で遺存する土器個体が確認される例は極めて少ない。もちろん、時間の経過と共に破片になったもの、土器の破碎行為が行われた結果、あるいは墳丘上の土器が流れ込んだ結果など様々な要因で破片となって検出されたという事態は考慮すべきである。その場合も多分にあったと推測するが、その証明が困難であるので、「据え置かれた」ような土器の出土状態に注目することにする。

一般的に墳墓から出土する土器は、「供献土器」として解釈されていることが多い。小稿においては「据え置かれた」ような状態で検出された土器の解釈として、供献の対象やその行為自体の極めて観念的な問題には言及できないが、類例に挙げた土器を墳墓祭祀に関わる「供献土器」と仮定する。すなわち、「据え置かれた」土器の出土状況を「供献行為」の結果として捉えたい。このことから、墳丘裾やその周溝内から検出される土器片の1つの解釈として、供献土器としての役割を持つものが含まれていた可能性が考えられる。強いて言えば、墳丘自体、あるいは墳丘周辺に當まれたものを含めた埋葬施設は、土器の「供献行為」に見られる墳墓祭祀の対象としての意味があったとものと推測される。

そして「円形状石組」の内側や周辺においても土器片は検出されている。順庵原1号墓の円形状石組の内側とその周辺からは、多数の土器片が検出されている。調査担当者の門脇俊彦氏によると、「第1ストーンサークルの周辺においては、明らかに破碎して置かれたと思われる土器片が、東隅突出部の中央付近からサークルの東側までの数カ所のかたまりをもって置かれ、この土器片列はここで直角に曲がってサークル内にはいり、サークルの中心線に沿ってL字形に配置されていた」とある。また、第2、3サークルの土器片出土状況には内部に土器片が出土していないものの、周辺から土器片が出土していることから、「サークルと土器片がなんらかの関係をもっていたものであろうと推測される点は両者に共通しており」とし、「サークル内が地山で、その地下部分にはなんらの施設も設けられていなかった事実やその数が内部主体数と同数の三個であることなどを併せて考えると、このストーンサークルは、やはり埋葬に伴うなんらかの目的で儀礼的意味をもつてつくられ、これらサークルと土器とを用いることによって、周溝内において葬送儀礼が行われた」と想定している^{註8)}。

中野美保1号墓の東辺にある「円形状石組」からは注口土器の口縁部（全周する）と注口部、肩部の一部が検出されている。また、西裾にある弧状の石列の内側からも甕の口縁部が倒立した状態で検出されている。同じく、阿弥大寺1号墓付随の第3土壙墓周辺から検出された集石遺構からは、中野美保1号墓と同様に、口縁部が下に向かれた状態で土器が検出されている。そして、仙谷2号墓の場合には、眼鏡状に組まれた「円形状石組」の周辺から土器片が検出されている。

「円形状石組」の場合においても、土器が「据え置かれた」状態で検出される例は限られている。しかし、「円形状石組」の内外を問わず、土器がこれに隣接して出土していることは注意すべき点である。多くの場合、墳丘裾やその周溝内から出土する大半の土器片と同様の状態で検出されているとは言え、「円形状石組」と土器には密接な関係があるものと考えられる。この「円形状石組」の用途としては、門脇氏が想定する葬送儀礼に伴う施設の可能性も考えられるが、儀礼の対象までは判断しかねないので、ここでは「土器供献」を行うための「墳墓祭祀施設」としての可能性を提

示したい。また、順庵原1号墓のように、埋葬施設の数と対応する可能性も指摘されているが、中野美保1号墓のように10個程度検出されている場合を考えると、埋葬施設が未確認という問題も残るが、後代の継続的な墳墓祭祀によって複数造られた可能性も考えられる。

その一方で、西谷3号墓のように突出部内を構成する「墳端装飾」と墳丘斜面の「貼石」に複数営まれているものを、どのように評価すれば良いのか問題が残る。これは墳丘裾や周溝内に「円形状石組」が造られる様相とは大きく異なる。すなわち、西谷3号墓の「円形状石組」は同様の類例が見られないため、「遺構として認識できない」、「偶然に円形状に見えるだけ」という可能性が残る。また、墳丘造営中に造られたものなのか、墳丘完成後に造られたのかも判断できない。これらの問題に結論を見出すことは現状の資料数からは不可能である。このため、西谷3号墓における「円形状石組」の評価は次の点を予見として、問題提起するに留めたい。すなわち、墳丘自体が巨大化し「墳端装飾」も最も莊厳化している段階のものであることから、墳丘装飾を構成する上での1つの装飾的要素としても意識され、墳墓祭祀施設としての機能が形骸化したものに変容したものが含まれている可能性が考えられる。特に、「円形状石組」の中心に1つ乃至2つの石を置くものが見られる点は、その意図は明らかではないにしろ留意される。また、突出部にのみ「円形状石組」が限定されて付設されていたのかという問題も残る。仮にそうだとしたら、突出部が祭祀空間としても機能していた可能性が想定される。

これらの可能性は、後期後葉段階における大型四隅突出型墳丘墓の調査事例の増加によって、将来検証作業が行えることに期待したい。

3. 出現時期と地域性

現状の類例資料からは、この問題を明らかにすることは出来ない。類例資料に限れば、弥生時代後期中葉段階の四隅突出型墳丘墓には「円形状石組」は確認される。そして、中国地方山間部や日本海沿岸部でも確認されているため、地域性については今のところ、特に目立った現象は見られない。

「円形状石組」は中期後葉～後期前葉に遡る四隅突出型墳丘墓からは確認されていないため、その初現やその系譜に上るものも不明である。ただし、「円形状石組」に付随する土器の出土状況から、これを「墳墓祭祀施設」として捉えるならば、後期前葉の陣山墳墓群に見られる石を使用した「方形の張り出し部」のあり方とは無関係ではない可能性も考えられる。

「円形状石組」は墳丘裾や周溝内に造られる場合と、墳端装飾に隣接したり、一部を利用して造られる場合がある。その規模は大半が60cm前後で、大きいもので1～2.5m程度になる。石組の形状は順庵原1号墓例や中野美保1号墓例のような一重のものと、仙谷2号墓例などの同心円状に石が凝集する二者が見られる。後者の石組みのあり方は、配石墓や集石遺構の石組にも見られる手法である。このため、墳丘に近接した上で、その下部に埋葬施設がなく、周辺から土器が検出されない限りは「円形状石組」と呼称するより、性格不明の集石遺構として認識する他はない場合がある。中野美保1～3号集石遺構がこれに相当する事例である。

4. まとめ

以上、過去に報告された「円形状石組」の類例を抽出し、その用途について検討してきた。結論としては、あくまでも現状の類例資料による見通しではあるが、土器供獻に伴う「墳墓祭祀施設」の可能性を指摘した。そして、西谷3号墓のような墳端装飾が最も発達した段階には、円形状石組

の用途が形骸化したものが現れているという可能性を指摘した。ただし、これらはあくまでも一つの可能性を述べたにすぎない。「円形状石組」の認識と評価に対しては、今後の発掘調査による類例の増加に委ねると共に、その認識に対する客觀性を高めるためにも、関係諸氏の批判と議論が必要とされる。また、冒頭にも述べたように、四隅突出型墳丘墓の周辺に當まれた様々な石を使用した施設との區別に関する諸問題も残っている。これは何故「円形」という形が現れるのかという問題にもつながる。これらの検討も視野に入れない限り、円形状石組の系譜、そして四隅突出型墳丘墓との關係を論ずることは出来ない。

小稿では特定の土器出土状況に対して検討を加えたが、今後は弥生時代前期以来の墓や墳墓全般における土器の出土状況に対しても検討を行う必要がある。特に、山陰地方と同じく日本海という共通の空間を有した地域に対する検討、すなわち北陸地方の四隅突出型墳丘墓や両丹地方の方形台状墓等の土器出土状況を含めた墳丘墓に現れる諸現象との比較検討は、各地の政治的領域や交流の解明に貢献できる可能性を孕んでいる。今少しの再整理を行い、改めて論ずることを期したい。

第2節 日本海沿岸部における方形貼石墓について －中野美保2号墓の事例から－

中野美保2号墓は、弥生時代中期中葉～後期前葉を中心に中国地方山間部から丹後地方以西の本州日本海沿岸で確認されている「方形貼（り）石墓」、「貼（り）石方形墳丘墓」、「方形貼石台状墓」、「方形貼石周溝墓」、「方形貼石区画墓」等の名称が与えられている墓制に属する（第129図）。ここでは、その総称として「方形貼石墓」の用語を採る。^{註9)}

この墓制の大半は弥生時代後期後半以降は減少する傾向にあり、丹後地方周辺を除く日本海沿岸部では四隅突出型墳丘墓という墓制が盛行する。現在まで議論されているのは、この墓制が四隅突出型墳丘墓という墓制の直接的な系譜に上るか否かというものであり、換言すれば四隅突出型墳丘墓の起源論に遡及される。

四隅突出型墳丘墓の起源論は、その「発生地」と「突出部の起源」という2つの問題に大別される。もちろん、両者は不可分の関係にあるのだが、前者の「発生地」については研究史上、一元的な起源とする見解と多元論的な見解との二者に大別することが出来る。前者を代表するものには、朝鮮半島起源説^{註10)}、中国地方山間部での成立とその一元的波及を説く見解^{註11)}、「ステッピングストーン（踏石状石列）」を四隅突出型墳丘墓の基本要素とし、その初現を中国山間部に求めた上で、「中国山間部型」と「山陰（伯耆・出雲）型」の展開を説く見解^{註12)}がある。後者では、弥生時代中期中葉～中期後葉の貼石の区画を持つ墳丘墓の「通路表現」に四隅突出型墳丘墓の「突出部」の根元を求めつつ、三次盆地（中国地方山間部）と日本海沿岸部で、系統の異なる四隅突出型墳丘墓の成立を説く見解^{註13)}がある。

ここでは、先ず方形貼石墓の「隅部の形態」の分析を出発点として、上述の「起源論」について考えてみたい。そこで、中野美保2号墓のそれを検討する。中野美保2号墓の隅部が良好に残る箇所は、南西隅のみである。ここを詳細に観察すると、2つの所見が得られる。

1つは、貼石が墳丘コーナーに対して対角線上に2列並んでいるように見える（第130図のA-A'）。今1つは、2個の貼石を挟んで2つの円形状に並んだ石組（その中心には1個の石がある）が並んでいるように見える（第130図B-B'）。